

# 高尾山 歴史の散歩道

明治大学博物館 外山 徹

59

## 大見晴台 その1

大本坊裏手の林道を抜けて三号路に合流、山頂を目指す。この道はかつて「これ通例富士参詣の間道なり」「八王子名勝志」(一九〇半ば)とされ、城山を経て小仏峠に出る道筋であった。一号路の人波へ合流するとそれまでの森閑とした空間とは別世界の感がある。やがて、大きく広場が開け、そこは大見晴台と呼ばれる高尾山頂である。

### 十三州見晴台

関東山地の東南端に突き出した高尾の尾根筋からは、北東方から南西方へかけての眺望が開けている。現在は木々が繁茂しており眺望も今一つと言ったところだが、ここは一名十三州見晴台とも言

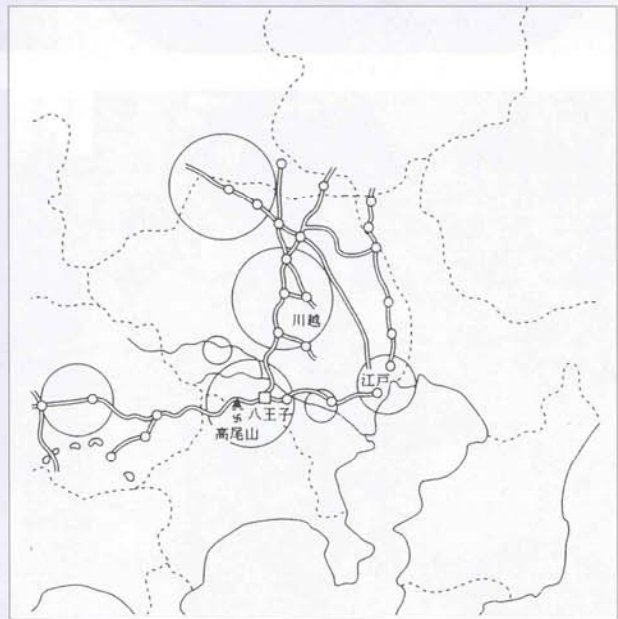
い、それはそのまま高尾山の信仰圏の拡がりとも言われていた。彼方の土地からの動きを考えると、眺望もひとしおである。

さて、近代以降はともかく、江戸期における高尾山の信仰圏を完全に把握することは、歴史学の方法論では難しい。一定程度その拡がりに見当を付けられる材料としては(享保二年・一七二七成立)「永代日護摩家名記」及び文化六年(一八〇九)「江戸田舎日護摩講中元帳」という二冊の護摩檀家帳がある。これは護摩供の施主の名簿なので一定程度経済的に余力のある人々の分布に限定されることにはなる。

十三州の内訳は旧国の

関八州に甲信越と伊豆・駿河であり、高尾山の信仰圏は甲斐(山梨県)を加えた関東九州とも言われる。先の檀家帳の記載によると、常陸(茨城県)、安房(千葉県南部)が不在となるが、その代わり陸奥(の内、福島県域)と信濃(長野県)が入り実際九州となる。檀家の分布はもちろん外縁部に近いほど少ない。

「家名記」には檀家となった年次と居住地の記載があるため、江戸中期における檀家圏の段階的拡張傾向が分析できる。最も早い年次は元禄一七年(一七〇四)で江戸の在住者が過半である。社寺参詣という文化的営為を主に江戸の町人が担ったことを考えると妥当であろう。享保期前半にかけ



護摩檀家集住域の概念図(実際の分布はさらに外縁部にわたる)

ては、江戸及び八王子宿中心に増加傾向を見せ、次いで寛保期(一七四一〜四四)にかけ上野田・上長房の地先二ヶ村及び現在の八王子市域での増加傾向となる。それ以降、明和期(一七六四〜七二)にかけて檀家圏はより外縁部へ拡がる。東は甲州道中の南側、北へは武蔵国入間・高麗郡周辺へ分布が延び、

最後の年次となる天明四年(一七八四)にかけては西へ甲斐国都留郡まで拡がるが、南方面へは未寺・門徒寺院の分布圏である相模国津久井県・高座郡北西部の範囲に留まる。つまり、江戸は別格として、基本的には八王子宿から東方、北方、西方へ延びる街道筋に檀家圏が展開する傾向である。講中

元帳」の檀家数の内訳を見ると、地元多摩の在住者がまず半数、四分の一が江戸。残りの四分の一がそれ以外の地域となり、檀家集住の濃淡が明らかとなる。

### 信仰圏拡張の傾向

ところで、武蔵御嶽や相模大山では付属する御師職による旺盛な布教活動が信仰圏拡張を促したわけだが、高尾山には御師職が不在である。また、刊行された名所記・錦絵の類もほとんどない。では、一体何がその信仰の拡がりを促したのだろうか？

やはり護摩檀家の広範な分布を見ると、護摩札の配札が信仰圏拡張の契機と考えられるが、御師職ほどのバイタリティとはゆかないまでも葉王院の使者が配札をしていたことが分かっている。

幕末の例になるが、文久三年(一八六三)の「配札順路小遣帳」には、八王子から日野、久我山(杉並区)、天沼(同)と甲州道

中を東へ、江戸を経由して中山道に入り根岸村台(埼玉県川口市)、鴻巣、熊谷、深谷、本庄と上野国(群馬県)近くまで北上、折り返して日光裏往還を南下、川越へ立ち寄った後、八王子に戻る経路が記されている。しかし、全ての檀家への配札が僧侶二名の使者による延べ二日間の旅程でこなせるとも思えない。「講中元帳」には、葉王院の使者が配札に赴く高尾山周辺部及び江戸までの甲州道中上の宿・町の檀家がそれ以外の檀家へ札を取次ぐ仕組みが記されている(江戸の檀家へは別途直接配札)。文久の配札時も恐らく取次を委ねられる主要な檀家を回ったのだと考えられる。

つまり、交通路を幹とし、枝葉が広がるように、檀家間の取次で札が届けられるシステムがあった。そうすると取次をおこなう檀家の居住地と取次先との人の往来が必要となるが、それを考えるに

は商業地として栄えた八王子宿周辺の経済動向が鍵になるだろう。高尾山の檀家の集住域に共通する事柄を探すと、生業として養蚕・生糸・繊維の盛んなことが言える。このことと、先に指摘した街道(甲州道中・日光裏往還)沿いの地域に檀家圏が展開したことは無関係ではない。すなわち、人の往来の前提として物資の動きがあったという推定である。幕末開港後に八王子から横浜への道筋が絹の道と呼ばれるようになるが、当時も北関東や甲州方面からの八王子への絹・生糸取引の流れが関係していたのではないかと。

### 八王子の経済的台頭

この仮説を裏付けるには、八王子方面への人と物資の移動が活性化する時期と檀家が発生する時期の整合性を考慮する必要がある。北関東の絹に対する江戸問屋の集荷機構が確立したのは

享保期(一七二六〜四六)とされるが藤岡・下仁田・伊勢崎がその集荷拠点であり、当初は中山道・利根川水系方面での取引が活性化して入間・高麗郡周辺の市の活性化はこの後である。八王子における絹市の取引高は、安永期(一七七二〜七八)においては川越・青梅よりも下位にあり、天明元年(一七八二)によりやく青梅と拮抗する。ここに入間・高麗郡周辺から南方面への絹取引活性化の動向を読み取れるが、同地における「家名記」の檀家発生は、それよりは多少時期の早い寛延・宝暦頃からとなる。これを経済交流活性化の前兆と見るべきだろうか。同地域の在住者は「家名記」檀家数の二・一五パーセントを占め、関係性の深さが感じられる。

「家名記」の最終段階である天明末年に、寛政改革の一環として幕府から江戸の有力問屋に対し物価引下げが要請される。江戸問屋はさらにそれを

産地仲買に通告するが、産地の側はおいそれとそれを受け入れない。結果、江戸問屋の系列を経由しない商取引が活性化した。「江戸」在地ではなく、在地と在地の取引が盛んになる時期。人と人の交流に基付く檀家間のネットワークに依拠する「江戸田舎日護摩講中元帳」の成立時期は、まさにそうした時期にあたる。

参考文献 林玲子「江戸問屋仲間の研究」御茶の水書房、改裝版(一九七八)

お詫びと訂正 二月号の記事中で「醍醐寺は…室町時代に入る頃には…当山派と呼ばれた修験者の組織を確立」としましたが、醍醐寺が修験者のはつきりと組織化したのは一七世紀初頭のことです。それ以前は醍醐寺の開祖聖宝を流祖と仰ぐ修験集団が存在していた、という解釈が現在では史料解析上の通説となつています。お詫びして訂正いたします。